特42
442

右近
女郎花
開寺小町
自然居士
大會

十七

東京圖書館

和書門	音樂類	函	四七 架	二 號	二 冊

東京帝國大學圖書館藏

右之通
[illegible]長周防守雲井殿
[illegible]
[illegible]
杉[illegible]
[illegible]

行幸とゝ[illegible]也。我此度初めて
洛陽の花紅葉
小野右と[illegible]馬場の花とを感ずる
也承り[illegible]今日右[illegible]る場の花を

詠めやとあらぬ雲ゐ行く末やゆ
きゝへ探りく。雨降きぬもをかく
もめつらし花の陰あらはさや宵と
松ゝきの行末も見る情より外
の森もちらつくや。右を乃馬場よ
ゝ急ぎ行よ見くるや
右をの馬場よりあれもみきへ
花見の人ゝとゝ見て。車をあらへ
興をつきぬ。扇面向ふ指やをもし
花を詠めもやとあらん　芝尾桃
きゝ花のひらく時人の心も花やゝ
ぬ。うつ出ぬ。空長閑成時
やうや　人渡きへ。柳桜をてきに
きて。錦をかさる花ゝ成　くる去

毎年きそひくらべ。心もちあるさ。氣色りん
花車は車は童一童みて梅のそこよ
ひかりきよ右とのの馬場ところまうり
ぐ。かきもの。ものや釣月寺のけ
そりもあ屋みて家井はは寺の松
ちりて。松も木高き梅うえの。たちえ
えみてくれる井のそつ花車也る

日芸ぶつえや地よつうらんく
長岡あるはいはまの花ひとてがはれ
馬場は並木の桜陰踏道やもちへ
えや道よく人家をみく。花ありきは郎
つるあれぶは陰よ車をうてよをくり
もひとをれは車は何かある者
語見うう出る右とのる場ひひかり

の日よりあらひたびもあらひたび
もあ人のこゝろもひとへ
きやゝ詠めくゝ山ん是葉子の此
可きて世車とよこゝろと更ひ
出られう（シテ上ニ）葉面白くもすきひや
右近の馬場のひおりの月向ひよ
たくゝ世車ぬ有ゝ歩ゝ歩ゝ歩ゝ歩ゝ歩ゝ

歩ゝ人ゝ人ゝ我れとよ葉子乃
行ゝあやゝ有ゝわゝていきん見ゝのゝ（ワキ）
社ゝ人なゝゝを（ワキ）左根よゝ有ゝ
しゝゝの学ゝ其間迄も寝ゝ有ゝ
ゝ人ゝ様ゝよゝゝ人ゝもゝ有ゝ
もゝ有ゝ人ゝ有ゝ（シテ）世ゝ人ゝよゝ
森ゝて（ワキ）ゝ歩ゝをゝゝ世ゝ（シテ）ゝひも

あ寸　見もあ人や花ぬ（ウ）く
ぎれも志ろめも花乃陰ま（ヤハ）相宮と
してそろ人へのぴ（ヤハ）ろあれろく花
車つ（ヤア）楊立てすれ本ぷ下ぷて
いちやあろめん（ヤハ）ぴ（ヤハ）や花ぬとよぴ（ヤハ）ら
ぬ（ヤハ）ろと志ろくい美畢ようろく花
ぴ引て初て緑ろんいのく引て緑ち

百ろ鳥花よ（ヤ）あれゆ（ヤ）あ寸ゆ
ろあきるよろやまれてうへ乃宮れ
ぴあきやうろ宮れろあれ
（ウ）ろろろよ（ヤ）れ（ヤ）ぴうきやぴ野れ志き
時めきぷ本のろ美ねろよ（ヤ）緑ちまき
都ぬ宮の遠と震わろや小野宮
ぴ（ヤハ）ぴ賢ろよ付とそて花楊ぷれ宮

可

殿

花のさかりにまて。紅梅
殿やたゝ私の緑よりあきをうめて
さよ松もみしたゝ月歌もあ
かれさしたゝ
つゝらいたゝ君の神のさかれ
もつゝとて。車も立や市。興宮先
そ此祢は居の右近馬場わる

祢幸たつとかりきる。蔦の紙の
ちややかくしも書く語り行社
つは本地と祢をたゝ松をまを
祢の祢此祢の社を弱き君代を
寄りて祢とたつし。紙とけい
有紙やたりて祢とおゝ行きうる
祢みてやうく歌きたつん。あら

きつつや雨とはあさ風よおもと
いきつつの　まつことありやうの月
ぐ　月も星らぬひさかたの天照
神みくに桜　官と顕き賞よ小野
ちくさもつ　神とゆつれ宮晴て
月の夜神楽をまち給とられよか
くれなきまよきりや花よくれ笑よきり

甲上三
空へうとても神の代ぐちひさ
つきあるしとて　神と君とのゆ
恵ぶ　ありきりう縁やく
なしニテ上
きつてきれ代を寿なる
ぶとの馬場乃ちるとして花上完よ
あきつかつて　稲九百度まま
つる神　和え乃陰もくきりあき

君の威光も歌たく花もゆらひ
治らぬもゝとゝあるゝ代はめてたちよ
上地
墨ゝとあるゝ天照神の惠をうきて
い桜の宮井と歌き給ひ　家よ
小野の神の宮居よ　花桜ゝの
神とあらはれ墨ゝの威光を歌て
きぬの神もうきの花さかり　舞童　月

も照ゝ花神ゝ　君を思ひ
神ゝの手の舞ゝ柏子を
うゝ君すゝ　わゝ雲のうきて
花よたゝまき枝よもとほゝ
ゝもゝ　治まる御代
花威ゝ東南西北も音きあ浪の
ぞれもそゝ　よ水の去ぬぞいきの

水とゞこをうつしうゑて
ゑ櫻宴のうつくしきを惜よ
ゆり枝よりつゝ花鳥のどかにか
きり雲よりつゝひくるかよあるや
ゆくすゑをかぎりあるやくもの
ゆくゑはあるを信きを

八尾

君道

廿日

昼は九州松浦方より出る儒者
我朱都を立て狂歌洗秋男
都よりいろ仁訓に松浦の里を
たらちめくゝ思ふの筑紫
別いつゝ絵よ書きちる。樣の道社
遥かにく為狂歌を早津の

廿郎

廿郎花

風山亭とやらん向ひよりまれなる
海の石清水八幡宮なれば我国の
宮作の宮とは一枝あきはらちや
と思ひ見成野過よ夢の花のと
を感と咲れて詠りやと感
掛も雲山麓の野へよりてそれぶ
程の花さう曇りて色をかけり露

一下にとゝみく虫音も心なるほまり
野草花をわびく蜀錦をつゝれ桂
林雨をそゝつく松風をきゝぬ洗雪
山乃女郎花ハ古手なるよまれる
名草なり昼もきもつゝ家を登る
れた花一本を手折りと洗ぬ帝花
乃邊は立よまれ有ハ其花おれ

給ひそ。花の色はもとより葉もとも
僧呼つく女郎とは。戯きよりなりときい
くたよ備者を考へとしくまして
や見へ男山のなをひてちきる女郎
花乃ぬまりる花よりなりて。おと清ちく
手折給ふ意おつ掘へやれ　扨は
ゆかりの成人さくまーませへ元祖

咲乱たる華花を八情に任せ
情に任せ社理なれど此聖人の花毋ゆ
紙花毋にてもまゝまゝ出家
乃ち有れども佛に手向と思ふ一大事は
ゆるしたべし
こゝに出家乃ち有る
れべ仏に向と思ふまれど彼菩提
乃非求みるに手向と其外

古き学ひ（ト、ニ行）打とらへ学ふさまを明る
たゞ（ニ行）おろ〳〵ご三世の仏は花を奈とも
へ猶更出家乃法学は社ぶ（ビ行）しもおろ
ぶへき（ビ行）れ　を様は古き学をひろ
げて備正遍昭にめて〳〵おわる計（ヒ行）
う世界花とハうまを行るきるそ　いや
はきハ社我おろよきと人は語をを

深く悪業をうゑの命と嘆くなり

其花をおくり人に疑ひなきれば其花

たとへをひきたつる出家の名をくはゝる

譬

かやうにふきけいたるふれるうら

色香よりつゝ無心どかゝやよりうつ

ゝ

あさ歌ゝ歌ゝて帰るわらくぶきの道

行ゝ

（キセル）（セン）（シテ）

やちくも可の古

ゑをいとうめりたりや女郎花と
思つゝゆきすぐるに男山ふもとたゝ
ずと思へば（下）袖の袂へや花さきてある
女郎花より気へ入りてやうよめてくれ（ヤウハ）（上）
や也一本折て女郎花やうなる面めさした
く賞女郎花ゆゑくどくめてくや男女
流女郎とはいきもの花のやうよ誰偖者を（下）

ここに「伊弉諾」神耶鄭のかりまうす夢を
五十の気よのためしも彼なるかと
やく（ワキ）洗野島（シテ）の御邦なる詠入らく
ぶ播宮よしまうしに洗廚こうの
と山とまる者ども播への古道
法ゆへ（ワキ）こうしこうの法
ゆゆしきて貴くうる霊かりきる霊

女帝

地ふれ　山下の人家ども
和尚の庵も濁江の水に落つる
くつぞこもまるとも深き極
ひもあらたまてめぐる
学行道の有縁ある法の八月
かの明月は芋あるる清極をも
久遠の月の男山

ぢやき紀貫之有かつ紅葉も照る
ひく目もうけつ石清水ぞきの
宴もたへありやをつて秋の景うつる
ぞつて箱を納じあるぞ法の外宮寺
方縁かつ地ふれ岩松ともの
くやひ山ひへ谷口そして諸末枝をつる
ねつり。鳩の巣あまて三千

世界もよう海ひ千年も同一月
の長ひあきのお垣みと志ろの錦か
けまくもかしこきなりとみたまを
見そなはして石清水八幡宮みくら居へ
給ふ時ふしへだや月の蓋てふ八幡
ヤ八幡ヤ女郎花と云ふ歌
男山よつきの君ら謂みて仏か
あら

何はおやぢまよ女郎花乃古事をひ
いて歌をヤ仏も侍るめく仏
女郎花と申す男山ゆ付たるいえ
れまくしへゆ洗山乃麓ゆ男塚女塚と
てはとみきへしてあるへ八へ見
成八男塚又洗方あるハ女塚ニ乃男墳
女塚よつて女郎花乃謂もゆ見へま

婦乃人の去中ふくん　甲　母其女姉

の人に國行くぐ字はめの成人や殺

世の都乃人男子に誠に備山よりく頼

風とやし人　そつやいなへを

清るもすしりあり　ヤ

狩りまれなるとひ便を思ふ

かきつばきく月よりかくわく夢乃

とくまり分よりく　一長ひ

男鹿乃角のつ乃ふ多く陰より

みしに毛城をとよ姫の色乃そく

南無妙聖出離生死頓證菩提

あ廣野人　稀あり我古墳あてよ

何もりう　散をあるそよ猛獣を

樫すそよあ　なつやぎけ

女郎

大昔の秋の風　廿上「うら淋しくも」

墨の　「うつろひつつ」　きよいもきの波

廿上「きしの」　元「元」　元「元」　元「元

あへて一本まもり。頼風心よ男
やう。梅を我妻乃。萬花よ成きる
よと。我花色も有りて。草乃孩
子我てても露ふまうちく立れ
も。此花根ゑる氣ちく。おつと乃
よれを。あひさのきよ立のをいもう
こと。家よつく貴ても。男山

乃昔と男つく萬花の一時をくねる
と書し水くさ乃弘の世とも有つ
うやう頼風うの時よ。彼えさを
ゆとり。しんやお我故よりなき
水池とはくいつ有ると成も
ぞくよ我科うかりをまよ
位遠と有り遠よ有をかく

上シテ
つゝく洗濯をなきてはかなもよ
去年よりもなほ塚よ新してよ
雪山や中なる墓墳を見めぐれば
まほろばの国原にまりうり張りひく
たゝ絵くゝ
上キリ
あゝ閻浮しらや
主上
邪婬の悪鬼八万を責くゝ
金力の通もはけしき劫の山の
よ
癒きぬ八万地獄やとそゞ
きのほまるつるきはかを通り
骨を伝たゝでうもいかりなり
うやつまる枝のだゝ世きてい
叫罪の苦やる果りやうおかりを
九十八
九乃一時を夢ね夢と夢そ常花
づ好やそてなや花の縁よう加へ

てたびをへつゝ

第十二

岡寺の町

待ひて今宵秋まつ〳〵星の姿

はしるこゝ一里半内

はしるこゝ

はしるこゝ

はしるこゝ

を伴ひ、彼者共物語をも聞くや
と云へ　ちり〳〵たる涼風と云
鬢と、一時よりある初秋七日のゆふへ
よそやうね　きよ繡の手向とて
彩色律の色しるしとて畫して
ちりぬ　繡や錦乃きらびやかなる花も
うつろひ枯草の露もとかさいあり
も。柄の手向よかあるへ
ちり〳〵　たゞ一枝をもちき
枯草長乃ちえを
ちりぬもあるよ便あり花を
函のうちよりる弁まりはひ
う柳風よあさむらわら緑や

やくたまうべ度よまうきとあり給
よへ考う覧入きゝ物りへ書へくれ去
昔よ帰く秋きあ御おくうかとへ
しやく いうこた考女よ申へきうす
乃へ見くハ南寺よ住者まくへ洪寺の
見遣ゑを清和古まてゆう考女れ御
す於ま給へひ子と讀へき抜きも

とへよりも清き形ためよ見
遣も見遣市出まてゆ 見くきれひ
もよらぬ事を形和ハ埋まれ人きれ
ぬまとあり花薄ほよ出へきま
きあらへ心を和として言葉の花を
書よう角おとうまきをひけらんや
きくもたまうまへくれたまうまれ

物部（平）なるまろ人の歌ひとつ

海つ母をもつぎ習ふ人のなかも

まをきよりいでしよりあり（シテ）　なくこゑ非

代よりぬれば父母にまをしてて

どよりかわさかいうきべ人とと

ゆくがてに夫かくしようきを讀給め

詠子なれとて雅俗律の言を歌ひ

（平）まつ清音山乃こゑ大君の御心をや

つきもなよ見よ詠こゑよ

なよ（シテ）　宮よりくこえひろ浜こゑを

父母として（平）手習ふ人つめ（平）ゆて

高き賤（シテ）さくらをわひ　（平上）都鄙を

國のひなへや（シテ中）　（シテ）　ゆくとき乃そ

さも（平）まけ（平）る心よ　（シテ）あるうらの

上巻

ちゝ宿禰やそ宿禰「生形へつくる人」
ゆゑとの国へよりも畫ゞ青柳の糸
をゝ人をゞ木の葉のちりまがへ心と
思ふつゝとちるたごの
手ふれ手ゆゑ
しやく 軍曹「かゝる種ばかりの人の
言葉ゆゑとしつゝ人ばかり子なれあるま

ばかりのちりすたれあるこゝろ人
まぜかくつさりひあるさりよば蜘
のつるまひ魚もとゝもゞ色の女の
手ひろ「見へ古良姫の市子あり
良姫とゝつんきゝ天皇の后みて
ゆまひ形のつゝ秋も昌流を
ゝて学ひへ 拙へ良姫姫流をま

あひ給ふやどの年月をへたる小野の
小町てふ歌人の流れとおぼしき人の
住めるまことに哀れなる草の根を結て
ばかりの水あらんかぎりとそ思へ
小町の子孫なる
心かうるをしるべ
文屋の康秀うの三河守なる加賀ノ介

あるとしへば細小町のなりふる姿ぞ此
世ようくきあれば之様の有まく
事ならばよだのをおつ
ぞ其小町乃果ならばいやいや小町とは敢
心給ふとよ（シテ上）「いや小町とは敢や（上ノ句）
色みてとは拙よ哉あるとは物
へ世中の心はいかゞやうなりや（中ノ句）
ひねきへ所を浮草の根を尋て
ぢ（上ノ句）ゝ水あるとは（元ノ一）いかゞとは（元ノ一）思
ま（中ノ句）ゝ（クリセ）
ゝ
ぬ白玉へ人とゝあめ（元ノ一）ゝ水の雨ゝとゝ
乃ゝを思ゝ草の花（元ノ一）ほまき（元ノ一）ゝ
ゝゝ露のゝ（元ノ一）ゝ
ゝゝ行ゝ露のゝ（元ノ一）ゝ
思ゝ（サレ）ゝ人ゝ見ゝ（元ノ一）ゝ
ゝ今ゝ

年月を送りけるに、まことに入る露
ゆき霜まつ世を言し出れば
「生命既よかさうとあつ
て」
てはいかで槿花一日の栄よりあり
あるうちなるあるさは教うよ世中よりいと
つまの日を数へと詠き事も我
おらじ尽まて草の花数一塚ばら

中
てもあり、きくふ霜の命成きうう
宮の首やきの
里ばり付たるもまた古事よ吟行
多入績て今
しきに気色いとへと花とまり
宿をもたいまとかさうがうよ人生花
とうきをどよへ水精とつねつ寵與

屋車のお衣入色とかちらく敷妙の
枕つまやのくちもとしてハ花の錦
入さらねのわきもの吹あれも
べらいもよ姫のてやを本まで敷一座あと
開寺の鐘入声ハ諸行無常とやお
れも老尼よハ色ハ逢坂の山
風の見ぬ生滅法の知らもえ入ぬて

ぬ花落葉ぬれくハ水きる音とて
草入尼よ視もあつ義とれまく
きしほ草やとの塩かまくま
気なるやうまくつよかひつよぬ
婦のこうあれハ水きく老入れよ
ひつかく異うくれ　見行　めるよ
織女入参遅おうひ参ても伴ひ仕

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]面白ハ[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の袖やなぎ昔豊
ハあるの五節の[illegible]姫の袖をうう
[illegible]七夕の[illegible]手向の袖
[illegible]初[illegible]是[illegible]
[illegible]やうへきに[illegible]
きハ不[illegible]人も[illegible]とやゆ[illegible]童
[illegible]の袖よ[illegible]人[illegible]
百年[illegible]百[illegible]胡蝶

のまひ[illegible]老[illegible]枝
[illegible]と袖も手[illegible]高ももよく
[illegible]立[illegible]袖ひろうへを
昔よ[illegible]袖ハ[illegible]蓋窓
[illegible]や[illegible]出[illegible]初[illegible]
[illegible]や明方の[illegible]鶯も
[illegible]告わ[illegible]る東雲[illegible]

図寺

みもすそ川の杜の下にて
くれもよりもあらじ夜中にて
そて枝をかりてよろづとぞの
わらやを綿とき百年の時を
ぞしかの町の墨のなかきをく

十尾

自然居士

知恵

加様なる者ハ東山雲居寺にあり
住居する者なり。実ハ自然居士を
中唱人食乃ハ宿か。一七日説法を御
宣ひて結願なりて出ぬ皆々ま
りて聽聞へ雲居寺造営乃
札をかけ給へ。その年斗寺月まる

狂乃あくしちめ法一向宣しとく
導師高僧よりあり経教をねうち
あつ〳〵三部一代教を釋迦年尼
寶号三世乃諸佛十方の菩薩よ
りてまうしく。惣祈の為の心經
や是八部諸佛を法ありをしう
ハうつくきは独みて急いて洪諷

誦文をしう後人聽首うらを風誦
乃ち三寶の僧乃に布施一裏を
きそろさしう家ハ二親の恩領仏
果の為子の代衰一宗。三寶よ借浪
しなれば西天乃貪女う一衰を僧
よ供きしハ乃の世乃逆縁今の
貪女を親乃左あ　子の代衰恨り

きゆく浮世の中をとく生くべき孝
先祖諸共に同じ墨よりまきんと接
あまたの自然居士雲水の神をあらを
ぬぐひ乃聽宿もとの神を濡さぬ
べかりく　かゝる者ハ東国方
乃人商人中ハ我洗慶都よりあまく
人を賞玩てくこと十四五計成女を賞

取てくが明日ハ乃同眠をもてて仏
狩よやアてゆうぎ未練ひんぎ渡り
仏ゆうげ乃ハ者ハ親乃迷善と
やらんやてもひつる狩法の座敷
よあらまきもたる自然居士乃ものを
寺よ乃門ものよ乃ものもるまく
乃年　乃年
為ひんやばれハこそ見べき

急てつまてて法入人へ（ねはて）やあまひろ
（ケキ）夫のあるやうあるはつまてゆき（ねさて）
いつに居士へ人（ニテ）行ものそ（ねそ）唯
今祖母をあきてはせとあるきれき
男入来りて迫立て行はるよやる
まきとまへやうかあるとしは行よ
やまては（レテ）意曲もあやはなより似せ

やう有きよみてはあ人詞詠をあきを
はりはは小神はかはのは代言とうへ
てはりもて不審はしかは居さり相
夢中主従者の親の迫善の為よ
我をは此小神はよへてはあをあきた
ると思はあるへ唯今の者ハとて
高人をてんへしはかきハ道理ておへひ

とゝ[illegible]ん[illegible]ば[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

ずこらも、ちかや白浪の洗舟路をや
ゝゝゝ

水の煙り震とへべ底ゝ[シテ]ひゝぎと
ちと二ちゝ[清]ちゝとへべ槽ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ[平阿]
まれねぎゝゝゝゝ毋とゝひゝゝゝ
面白くものゝゝゝ[シテ]ゝ掛ゝ行ゝ毋や
ゝん[シテ]見ゝ自然ゝ在ゝ玩経者ゝ
ていゝゝ説法ゝ場ゝ[ワキ]ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

法乃ん方ハ様よりも使よりも者ハ
行逢ぬ者とハ
室へ帰りぬ法ハ法ハ程よ者方乃法
ハ乃ハ方ハ法ハ
那ハ前ハ此者とハまて
奥ハ乃国へハ乃ハ
ハ乃ハ

携訪ハ乃ハ携訪といハ捨
ハ乃ハ命ハ
ハ乃ハ命
ハ乃ハ
ハ乃ハ
ハ乃ハ
ハ乃ハ

是はうしろ人しるてへ叶はいまじ能く
知と楽しいなど奥ようしろ人高人の教は
ようじろ人は賞うはわく自然居士とやを
行經者をうひ沈れたりたるあんやく
やはいつぐ一大すみてはいるよぶ沖をて
おつてへ叶ひしまし　野　教らもた
様よあはは去おうしたたををせへ学会

よ作行よど色てくよおみつくしろ人はうを
ふみてはいて　も船くを　野　おくく
自然居士急いつく舟より法あり之人
　シテ
はいやく　節余よは下ましはい　野　行の
節余乃之人き唱はよりう之　シテ　の船頭殿
乃は顔の色社おをうて之　野　いやちが
ともおをりはまじ是ちる人乃ア

ちまたにべう度ばかりやとへとりてゆう
自然座乃禁のつ事を承ふく仕
ぢ〜まつく法べをあれと申ちまた
如て座ハ禁まつるすハなくハ
平
ゑれハ法偽りてしハ一年今のごとく
説法宣ふ時べて聽宗乃眼目
ゑたちんと高座乃上ようて一ち法禁

ゑ〜ゑ奥迄も其中ハ強よ一
ちゝ法禁ハ有ゑれ程言待
言ゑて行ゑを指のすもへ禁
をまひんゑ洗ゑと給りへきゑ
法禁をゑて其間乃ちまぢりて
ゑをへし先ゑ乃曇ゑを立て
法禁ゑへ解くゑと業まるゑ給よハ

紫式部集　十一

紫式部集

紫式部集

紫式部集

紫式部集

紫式部集

の一紫水まうしの蛍と虫
ぞも虚空よ蓬きるか夏一紫の上
よ葉つゞ蓬小くまうかはれたる
ゆくも柳の蛍と吹くる風ぞまうし
ゆれげよすやと秋霧ぞたらる
蛍のつる蓬宮とすると思ふまうり
たくみて毋とつくまり黄帝昌上

ゆれて烏江もときわうして蛍を
やすく亡ほ泊代と治めるまうす
一萬八千歳とうや　幼きい紅のきん
乃字ときみよもと云たり梅
又天子乃法領ときうもと名付
たくまつりぬと一紫と云うす此
学よりうまつりぬ君乃御庭

とゞ龍頭鷁首とやきゝ山代よりを
ゝ龍頭鷁首と
こゝ
ここ
こゝ
こゝ
こゝ

又甚しくぶらうれもよハ百八の声
をぶらぶらと行よハ漏ハほのぶらり
とうゑを見もとめ（たれ）ぶらぶらハ志賀の浦
波ハ（下同）ちく波やく志ゝ辛崎の
松の風もちらもくとさ見乃ま
ねをぶすすてもれぶらぶらより
手をもするわびをハたをきてた

（笠）

ひ絵（罕行）手をもるなをく寝ハ須よ
しまらをくしゝ中乃ようつゝと折
てれみをく（吉）大津絵ハ浪乃音ッく
よをてハ居をどうちぶ風雲ま
よふるかゝつどくろくとあれ時
をぶりくる雨ハちくつゝとぶちく
乃行のぶらをすり池乃氷のとう

（十四）

自筆

せうとゝ敏とまうちきゝ和と松
まり狂言おうらも法乃道べ八蓋
花の君よりせる和うちうりで
いとうとうちつまてゞよ都よりう
きうと

十五尾

大會

宇サレ

夫一代ノ教法ハ五時八教ヲきり
教門教外ヲ分チ五味ヲ五附とい
ハ華嚴阿含方ハ教若法華涅槃教
と八是ハ最通ノ門ゝりまやま教主
乃秘藏ヲきゝ想成ノ乃聲を
同ゝよりハ説ハり仏法を学教を

ちんぞ有難き御法とは
乃ゥやまとうつもれぐ一仏乗の
願よ慈悲の恵日まこと
寶を入しく常楽と音信
ぞ深山ひとり月を
古殿の燈をかかげ宮廷の帝と
ありしく石上の磨き清き苔路を
歩まうしの水底ふかき洞やか
めりし洗濯室内へ参りし
きしりの参りの向ひをまし
よ参内ようしとさめ
見し洗ありし住居まる宮僧
我既分まうし手を所縁をよ
命長をかりし方編に

世の中に為に尽して居る人
平
民は思ふ事無き所あれば
をたまはり度と思ふ人
シテ
都東小院の
ワキ
宮仕人しべ
ワキツレ
なれども此新恩に行
ワキ
ツレ
ワキ
ツレ
ワキ
ツレ

ばかりに我為にうえしはまひく
疑ひ給ふなとをしくを約諾
ぜひくと約束ありきよ
みしまの杉一村よ立寄てめとめさせ
給ふ。佛のはなれ聲乃ゆえれ、ハ音楽
眼をひらく。絶妙と云
みまハ雲霧。おのくるあのあり
れと

ひとくとあり。かこ下眉つぶすれを
さと吹あきく梢よあるとゞ音よを
ゆるりかさきひやうよ失よきを
ほしテ上 丈山ちハさ紀つれを生ひぐるい
ゆるよ高きとをあ海をぼうを流
きをとひ。杉よりさ下をあを
上ちハ
おと うきや座そよ音楽御音さうくゞ

沖邑あり[illegible]脈をひらきあ
り[illegible]山をもひらき霊山と
あり大地をひらき丈六七宝
寶樹をあらく釋迦如来獅子乃
座より顕密給へり普賢文殊左右
給へり[illegible]薩埵雲霞のごとしいさ
このうへより龍神八部おのく拜ね

ねりもの　加葉阿羅の大聲風か
葉阿羅の大拜[illegible]一面より向きうど
より四季の花ひらくうど天人雲よ
づあり微妙[illegible]楽をうしひめ来
明の法を流給へ方羅きそう
明[illegible]僧侶[illegible]信
ちのれ
を発し随[illegible]の涙服より[illegible]

合掌し、帰命頂礼大恩教主釋迦牟
尼世尊、我れ今まことの心を以て、
願ひ奉る震動し、帝釋天よりくだる
ひかりの如くに、天狗ども、
ひとつ残らず、ちりぢりばらばらに
成りて、刹那の間に、帝釋あらはれ給
ひ、魔術をあざけりあざけり給ふ
気もちくらくよりあつくなりたり
きゝ　帝釋、此時ひかりをはなつがごとく
なりし信者をあとにのこしたまま
ひらくよ者をみをはなれ羽をそろ
へ、ひとつとなりて羽なしく
なりて、雲路をかけてゆく
ハ帝釋もひかりの如くに

を給ふ其時天狗岩根をうちくだき
おとろくみえしかばかくをも
こゝにこゝにいたりてみて深谷乃岩洞よりうまれり

右之本者觀世太夫織部
章句眞本令版行畢
正徳六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛